

ロマンス語における受動表現形式の問題点

Il costrutto passivo nelle lingue romanze

菅 田 茂 昭

Shigeaki SUGETA

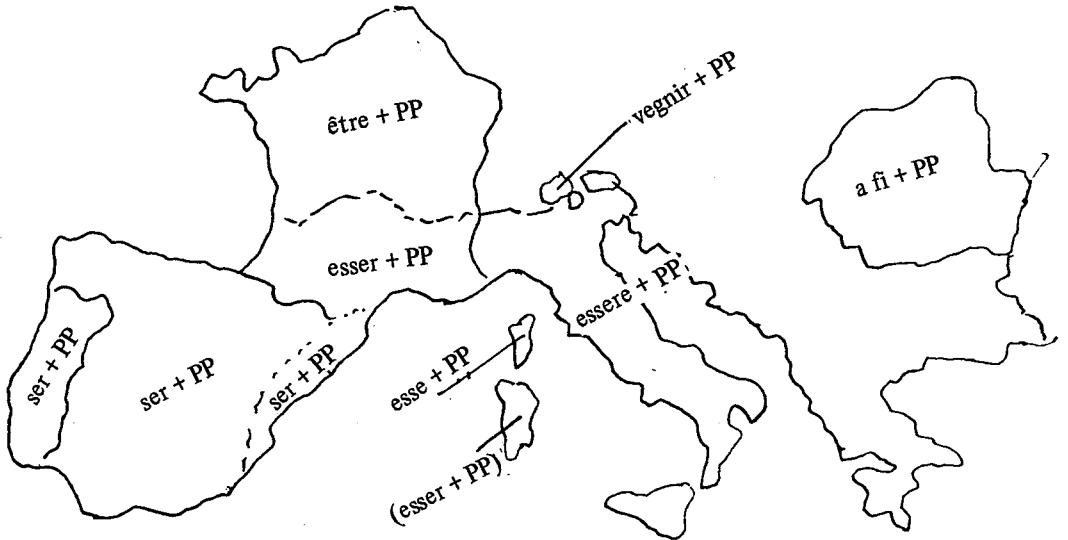
1. ラテン語からロマンス語への移行において、動詞の屈折形態は総合から分析へという一般的傾向のなかでかなりの部分が単純化された。ロマンス語の受動表現形式もその結果生じたもののひとつである。事実こんにちのロマンス語のなかにはラテン語の総合的な受動の一Rの痕跡はなく、むしろ主要ロマンス諸言語をもとに再建される共通の源は分析的なESSE + PP(過去分詞)である。一Rの運命については、本学会第22回大会(1985年5月25日、於早稲田大学 cfr.「ロマンス語研究」19. P.88)において非人称構文をとりあげた際にも DICITUR「言われる、言われている」→SE DICITまたは DICTUM ESTとして触れている。受動形式動詞(deponentia)が、一連の語末子音が脱落するなかで、たとえば HORTOR「私が励ます」に代って HORTO が用いられる(なお不定詞も HORTARI に代って HORTARE が)という具合に姿を消していったのを契機として、おそらくはこれと平行して受動態においては AMOR「愛される」>AMATUS SUM, AMABAR「愛された」> AMATUS ERAM のように順に助動詞を用いた迂言的表現形式にとって代わるにより、消失したものと考えられる。

しかしながら受動の一Rに最初に代わりえたのは、たとえば VOCATUR「呼ばれる」> SE VOCAT のように再帰形式であった。それは3人称において、しかも文法的主語が特性(一human)をもつ場合に限られた(1,2人称では本来の再帰にとどまり受動の代用にはなりにくいからである)。1,2人称においても可能な代用形としてもっとも容易な手段は完了受動詞とも呼ばれる過去分詞に頼ることであった。非定形に属する過去分詞に対して定形に置かれる ESSE を加えた形式 ESSE + PP はすでに完了系列の受動表現形式として PORTA CLAUSA EST「扉が閉められた」のように存在していた。この CLAUSA EST が未完了系列の CLAUDATUR「閉められる」に移行し、これにとって代わるには総合から分析へという傾向に加えて、この表現形式自体にもそれを促す要因が潜んでいたことは見逃せない。(PORTA) CLAUSA EST は、本来の完了(「閉められた」と同時にその結果生ずる状態(「閉まっている」)をも表わしたこと、さらにラテン語の完了にはいわゆる現在完了的要素(「閉められている」とアオリスト的要素(過去のある時点で「閉められた」とが区別されずに共存していたことを考慮すれば、合計3通りの意味を表わしたことになる。完了系列の CLAUSA EST が未完了系列の CLAUDATURにとって代わると、これまでの完了系列の機能を維持するべく形成された CLAUSA FUIT がアオリスト的働きに、現在完了的働きは CLAUSA EST STATA という表現形式で示されるという具合に分化したことからも十分理解される。それぞれ現代イタリア語では *fu chiusa, è stata chiusa* として受け継がれている。状態の意味はまさに CLAUSA EST 自体が受け継ぐことになり、そのために未完了系列に移行してからも本来の受動(「られる」と状態(「られている」とが未分化のまま今日にいたり、現代イタリア語でも *la porta è chiusa* は受動(動作)「扉が閉められる」と状態「扉が閉まっている」を

表わしうる。両者の区別の曖昧さは—Rに代ってESSE + PPが採用されていらいのものである。ただスペイン語のように状態の意味ではserに対してestarを用い、la puerta esta cerradaとすることで解決をみた言語もあり、またイタリア語においても受動(動作)を表わすには la porta viene chiusa「扉が閉められる」のように助動詞としてandareやvenireが用いられることにも注目しておきたい。

だがこの区別の曖昧さの未解決の裏には一般にロマンス語において受動構文が、未来形の場合と同様(cfr.「ロマンス語研究」19.P.87)、ことに地方の方言においては使用度が低いという事実も関係しているように思われる。なお興味あることは、こんにちでも完了系列においてはもっぱら受動(動作)が表わされるために、このような曖昧さは生じえない。イタリア語でessere以外の助動詞に頼る際にも andò perduto が「失われた」(受動)を意味するのに対して、現在形に置かれたva fattoは「なされる」に「なされるべきである」の意味が加わるという現象が存在するほどである。

2. ロマンス諸言語における受動表現形式の分布を図示してみる(例文は省略)。



3. 受動構文は Paolo mangia la torta「パオロがパイを食べる」→ La torta è mangiata da Paolo を $SN_1 + Aux + V + SN_2 \rightarrow SN_2 + Aux + essere + PP + V + da + SN_1$ といった書き替え規則で捉えるだけでは十分ではない。受動構文の特徴をいくつか拾ってみる。この構文は能動構文の目的語を既知のものとして捉える表現手段である(なおこの際、受動構文における主語の位置も問題となるようである。cfr.「ロマンス語研究」19. P. 89)という側面や、受動構文は概して都市型の言語に属しており(プロヴァンス語の Los Tures l'asselgéron にフランス語訳では受動構文 Elle a été assiégée par les Turesが対応する例がある)、受動表現にはより知的な複雑さが伴うことも指摘しておきたい。ここでイタリア語の受動構文をとりまく制約を若干拾ってみると、動詞が他動詞であることのほか、能動構文における目的語が不定詞からなる場合(es. credi di venire)は不可、dovereなどの様態動詞、さらに avere自体に

も受動形が存在しない、使役・知覚動詞のあとでは受動構文が起こらない(es. Gianni ha fatto [visto] *picchiare* (< essere picchiato) Pietro da Mario)など。なお特異な例として自動詞の受動構文がまれに存在する (es. In quegli anni fu molto discusso della presenza della vita su Marte da parte dei biologi. < I viologi discussero molto ---). なお一般に能動構文と受動構文の間に Many men read few books 「本をわずかしか読まない人たちは数が多い」 → Few books are read by many men. 「多数の人々に読まれる本は数が少ない」のように意味上のズレが生ずる問題はすでに生成文法の側から指摘されているところである。

参考文献 : G. GENOT (1953), H. Lausberg (1976〔改訂イタリア語版〕), V. Lo Cascio (1976), G. B. Mancarella (1978), G. Rohifs (1969), P. Tekavčić (1972), V. Väänänen (1982〔改訂イタリア語版〕) ほか。